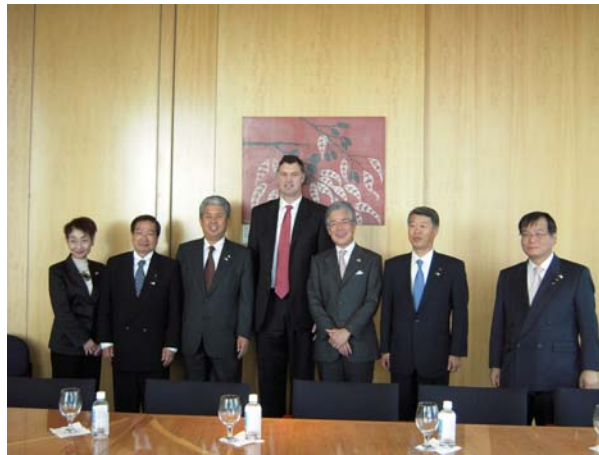


7月21日（月）

ビクトリア州計画・開発担当大臣表敬訪問

ビクトリア州のヤラリバー周辺開発やトラムなど都市計画とデザインを担当するマッデン ビクトリア州計画・開発担当大臣を表敬訪問した。

両市における都市計画に関する課題や土地利用などについて意見交換をする機会となり、大変有意義な訪問となった。



マッデン計画・開発担当大臣を表敬訪問

【懇談概要】

大阪市：メルボルン、オーストラリアは初めて訪れたが、新しいすばらしい環境が開発されているということを実感した。

大臣：幸いなことに人口は増えており、メルボルンの人口も急激に増えている。市街地近郊の土地利用にかなりのプレッシャーがかかっている。

今のところ平らな横に長い開発である。今後、集約していかなければいけない



と考えるが、様々なあつれきがある。

メルボルンの人々は個人的な空間を大切にする。家をもっと密にすると異議を唱える人もいる。フットボールと似たところであり、ゆったりとした空間で余裕をもった生き方をしたい人が多い。

私自身、誰かから何かを言われると審判役を務めなければならないときがある。

大阪市：大阪は狭いエリアでもともと人口密度が高いので、上に伸びるしかない。

大臣：大阪では大きな反発がないのではないか。

大阪市：大阪は、都市計画や都市開発を見直さないといけない時期にきている。

大阪市：我々は今回、大阪のシティプロモーション役としてメルボルンを訪問している。30年前に姉妹都市提携した当時のメルボルンからはずいぶん様変わりしていると思うが、水辺の環境整備など非常に参考になる点があった。

大臣：大変うれしく思う。メルボルンは人口が増えてきているので、土地の再利用を考えていこうとしている。

大阪市：大阪は都心部に「水の回廊」があり、これを利用して、来年「水都大阪 2009」を開催するが、このイベントに関しても、これから先どのように大阪市を創っていくべきか非常に参考になった。

大臣：ビクトリア州、メルボルン市においても、他の都市と同様に人口問題がある。昔の港湾設備など現在使われていない土地があるので、特に港湾施設は1カ所に集約し、空き地を確保し、宅地にして利用していく。

大阪市：昨日ドックランズを視察したが、開発手法等、例えば駐車場が遠くても歩くなど、オーストラリアの人たちの国民性が感じられる。国民性、市民がどう



いう動きをするのか見習わないといけない。

大阪はバブルの崩壊を経験した。市が開発主体となって失敗した。今ある市街地をどう活性化していくのか、大きな課題を与えられている。

大臣：ドックランズはユニークな手法である。政府当局がマスタープランを策定し、それに基づいて民間が開発するものである。インフラは政府が行い、デザイン等について監視するという手法である。

交通、住宅、港湾機能というのはどこの都市でも同じ課題があると考えるので、今後、大阪市との間で情報の共有ができることを期待している。

メルボルンでは今までにない人口の増加に直面しており、人口の管理などどのように扱っていけばよいのか学ばせていただきたい。

バンクシア・ラトローブ高校訪問

大阪市立高等学校と姉妹校であるバンクシア・ラトローブ高校を訪問した。

高校ではグレン・ホワイト校長とジェリー・フォーガティ校長が出迎えてくれた。この高校はバンクシア高校とラトローブ高校が統合したため、現在校長が2名い

る。学校の活性化ということで、さらに小学校3校と中・高校3校も統合の対象になっており、政府から予算が下りればであるが、統合されると小学ゼロ学年から高校3年までで1,800人の生徒数になるとの説明があった。

校長に案内され、各教室での授業風景を見学するとともに、7月17日から26日まで交流事業等の研修に参加している大阪市立高等学校の生徒とバンクシア・ラトローブ高校の生徒による日本語の歌（上を向いて歩こう）が披露されるなど両校の交流風景もあわせて視察することができた。



大阪市立高等学校の生徒による交流授業

その後、図書室において両校の生徒たちと歓談し、活発な意見交換が行われた。平松市長からは「姉妹都市提携30周年という節目を迎えたが、これは市民間の交流を積み重ねて、相互理解に努めてきた結果であり、今後、将来を担う世代である高校生が互いの国を行き来し、異なる文化に触れることは、グローバルな人材を育成することになり大変意義深い。この経験を生かしてほしい。」との挨拶があった。

最後に、大阪市立高等学校の生徒の皆さんより大阪市歌と校歌の披露があり、全員で記念撮影を行い、両校の交流がますます深まることを願って高校を後にした。



メルボルン市内トラム運営について視察

平松市長は大阪セミナーに出席のため、大阪市会代表団5人でメルボルン市の名物であるトラムを運行しているヤラ・トラム社を訪問し、マネージャーのパウロ氏から、ヤラ・トラム社の事業概要及びトラム運営等について説明を受けた。

市内を循環しているシティ・サークル・トラムは1994年4月29日にもともとは観光客用として導入されたが、運賃が無料のため、現在では市内観光客のほか通勤客や家族連れなど多くの人たちが利用している。州議事堂や旧財務省、フェデレーションスクエア、ドックランズなど主要な観光名所を結んでおり、毎年、300万人の乗客を運んでいる。



ヤラ・トラム社の事業概要等について説明聴取

現在、メルボルン市内の人口が増加しており、会社にとって今が成長のときであり、人口密度、需要に対応できるサービスの提供が必要であると考えている。

例えば、キャンセルレートは1.5%から0.2%に、定時性については20%アップし、サービスの信頼性は高まっており、また、安全性については、衝突事故は27%、脱線事故は55%それぞれ減少した一方、ロスト・タイム・インジュリー（職員がけがのために仕事ができない）は40.3から5.5に減少したことは我が社として大変自慢できるとの説明があった。

今後の展望であるが、乗車率が飽和状態であるので、車両の入れ替えを進めており、5両を海外からリースし、乗客数を増やす計画である。

また、次回の契約・入札に向けて現在準備中であり、優秀な人材の維持、トラム専用道路の確保に努めなければならないと考えているとの説明があった。

【質疑応答】

質疑：新しいトラムの車両はどこから購入するのか。

回答：フランスのマールスからである。2011年購入予定。現在、仕様を決定し、州政府に諮っている。

質疑：大阪ではバスは赤字だからといって運行本数を減らしたら余計に乗客が減った。自動車を減らすことを考えないといけない。

質疑：1人の運転手の労働時間は？

回答：8時間である。（4時間勤務→4時間休憩→4時間勤務）

質疑：停留所に運行状況を聞くインターホンがあるが、このコントロールルームと繋がっているのか？

回答：時刻表に基づき答えているため、現状にあっていない場合がある。

質疑：乗客は増えているのか？

回答：年間4%ほど増加している。

質疑：運転手の年収は？

回答：6万豪ドル（約570万円）から7万豪ドル（約660万円）である。

姉妹都市提携 30 周年記念事業大阪市主催答礼レセプション

メルボルン市役所のヤラルームをお借りし、大阪市主催答礼レセプションを開催した。



まず、平松市長、多賀谷市会議長から、今回の訪問にあたりお世話になった方々への感謝の気持ちと両市の友好関係がさらに発展していくことを祈念し、それぞれ挨拶が行われた後、市会代表団の団員4名からもメルボルン滞在4日間に受けたメルボルンの方々のおもてなしに対し感謝の気持ちを込めて1人ずつ挨拶を行った。

続いて、ソー市長から挨拶があり、挨拶の最後には、干ばつで苦しんでいたメルボルン市にたくさんの雨を運んできた代表団に対し感謝の気持ちとして「雨量計」が贈られ、今回の訪問を象徴するかのように和やかな雰囲気になった。



ソー市長より雨量計のプレゼント

長谷川在メルボルン日本国総領事による乾杯の発声後、立食パーティーが始まった。代表団一同は、今回の滞在でお世話になった方々と時間の許すかぎり歓談し、意見交換、情報交換を行った。

出席者全員が、これからもこの友好関係が続くことを確信し、レセプションは終了した。



長谷川在メルボルン日本国総領事と

おわりに

今回、姉妹都市提携 30 周年記念事業としてメルボルンを訪問したが、4 日間という短期間ではあったが、各種表敬訪問など様々な形でメルボルンの方々と交流を深めることができ、大変有意義な訪問であったのではないかと思います。

一方、レセプションや昼食会の際にメルボルン市議会における議会運営や議員活動について議員と意見交換する機会があったものの、日程の都合もあり、議会活動に関する調査に十分な時間を確保できなかったことは残念であった。

今回の出張を通して、メルボルンの人たちのおもてなしの心に感銘するとともに、国際交流、都市間交流というものは、周年事業だけでなく様々な場面において、おもてなしの心を持ち相手と接することが、両市間における絆・関係を強くするのではないかと感じた。

最後に、今回の海外出張に際し、事前の準備及び現地での案内、随行等でお世話になったメルボルンと大阪両市の関係者の皆様に心からお礼申し上げます。